

## オセアニアの歴史

著者	須藤 健一
ページ	114-119
発行年	1980-01-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5182">http://hdl.handle.net/10502/5182</a>

# オセアニアの歴史

須藤健一

## 「航海民族」の移動史

ヨーロッパの探検家や船乗りたちによって、太平洋の島々がつぎつぎに「発見」された大航海時代に、驚いたことには、それらのほとんどの島々にすでに原住民が住みつき、豊かな海洋文化をつくりあげていたということである。日本列島の南に広がる大海上には、まさに絶海の孤島としかいいようのない島島が散在し、その数は、八〇〇〇余りにもおよぶ。

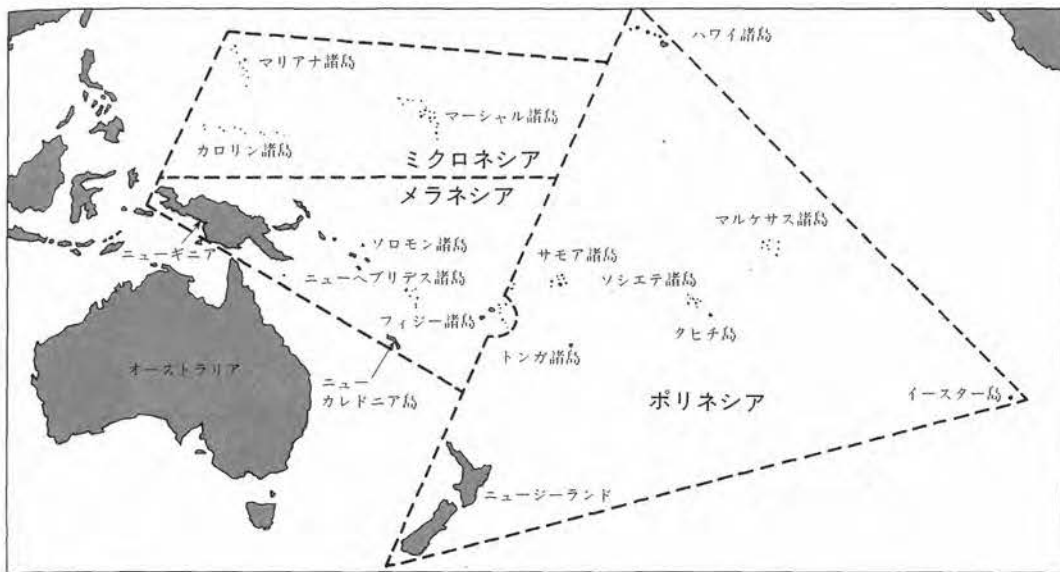
オセアニアは、オーストラリアを除くと、マイクロネシア、ポリネシア、メラネシアと、語尾にネシアをつけた三つの地域に分けられる。ネシアは、ギリシャ語で「島々」を意味するから、太平洋は、「島々の世界」ということもできよう。マイクロネシアは、赤道の北側に東西に帯状に広がる小さい（マイクロ）島々を指す。ポリネシアは、北はハワイ、東はイースター島、南はニュージーランドを三頂点とする三角形の海域に位置する多くの（ポリ）島々を含む。メラネシアは、ニューギニアから赤道にかけて弧を描いて連なる列島群で、黒い（メラ）島々とよばれる。キャプテン・クックや大航海者たちのまに姿を現した「島世界」の住人は、一体いつごろ、どのようにして遠く隔たった島々に住みつけたのであろうか。まずヨーロッパ人が目にしたのは、二そうのカヌーを並べて何本かの横木でそれらを固定した甲板の上にキャビンまで備えた双胴船であり、船体の片側に腕木を張り出した大型カヌーで一〇〇〇〜二〇〇〇の航海している「航海民族」の姿であった。大型のカヌーに、数十人もの人とブタ、ニワトリ、イヌなどの家畜や食料を積んで、彼らが未知の世界を求めて船出したことは想像にかたくない。となると、彼らの祖先は、いつの時代かに、数百、数千キロもの大海洋原を果敢に乗りきって移住したことになる。一五、

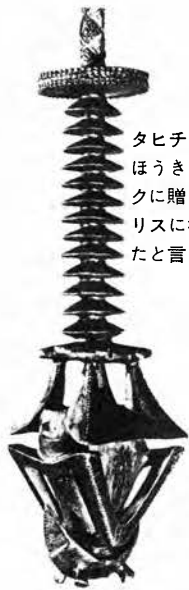
六世紀に始まるヨーロッパの「地理上の発見」よりずっと前に、大洋を渡った彼らこそ「大航海者」であり、太平洋の島々を最初に「発見」した人々ということになる。

文字をもたない彼らの歴史の謎ときは、一九世紀以来、多くの学者によって空想豊かに語られてきている。それらを要約すると、二つの大きな説に分けられる。一つは、東南アジア起源説であり、もう一つは南米起源説である。前者は、移住の経路をめぐって、メラネシア経由説とマイクロネシアを経てポリネシアへ達したという二説に分かれる。最近の考古学や比較言語学の実証的な研究成果によると、東南アジアを故地とし、メラネシア経由で太平洋の島々に民族移動がなされたとする説が有力視されている。

それには、紀元前数千年に始まる中国の漢民族の領土拡大に影響されて、その周辺にいた諸民族が、東南アジア島嶼部へ進出したという歴史的背景がある。そこから、メラネシアに植民が開始されるわけだが、それがいつごろのことであるかは今のところ明らかでない。しかし、紀元前二〇〇〇年ごろにはすでに土器をもった新石器文化人の植民者が、ニュー・カレドニアやフィジー諸島など、メラネシアの東南端の島々に居住していたことは確かである。それらの植民者は、フィジー諸島からさらに東方のポリネシアへ移動を続けた。

ポリネシア人の祖先は、紀元前一〇〇〇年ごろに、サモアやトンガ諸島など、ポリネシア西部の島々に定着した。その後、紀元三世紀のころになると、そこから東ポリネシアのマルケサス諸島とソシエテ諸島に向けて移住がなされた。この両群島は、以後の民族移動の前進基地として重要な役割をはたしたようである。マルケサスからは六世紀前後にハワイへ、五世紀ごろにイースター島へそれぞれ移住がな





タヒチで使われた  
ほうきの柄 クック  
に贈られてイギ  
リスに持ち帰られ  
たと言われている



タヒチの戦闘用カヌーと兵士たち 航海術にたけた彼らは用途別にカヌーを作って海をかけまわった

トンガでこん棒  
として使われた  
武器 側面には  
鳥や人間をデザ  
インしたレリー  
フが刻んである



タヒチで使われたほうきの柄 クックに贈られてイギリスに持ち帰られたと言われている

タヒチの戦闘用カヌーと兵士たち 航海術にたけた彼らは用途別にカヌーを作って海をかけまわった

され、またソシエテ諸島からも一〇世紀ごろにクック諸島を経てニュージーランドへ、一二―一四世紀ごろにはハワイへ向けて第二波の民族移動がなされた。そして、広大な海域に分布するポリネシア人の言語や宗教などの土着文化が均一の様相を示すのは、彼らの祖先がサモアやトンガ諸島に住みついた約一〇〇〇年のあいだに、その祖型をつくりあげたからとみなされている。

第二のミクロネシア経由説は、ミクロネシアとポリネシアの文化的類似が著しいことから主張されたものである。確かに、パラオ、ヤップの西カロリン諸島やマリアナ諸島には、土器製作の技術をもった人々がフィリピン、インドネシア方面から移り住んでいたことは考古学の発掘で明らかである。しかし、そこから、カロリン、マーシャル、ギルバートを経てポリネシアへ民族移動がなされたという根拠は乏しい。最近の比較言語学の成果によると、ミクロネシアの中央部から東部へかけての移住は、ポリネシアへ向かった一派がメラネシアのニュー・ヘブリデス諸島から北上したと推定されている。というのは、ポリネシアとミクロネシアの住民は、ともにメラネシアの島嶼部に住む人々と同じく、オーストロネシア語族に属する言語を用いる人々だからである。

さてメラネシア、オーストラリアには、オーストロネシア語族以外の言語を話す人々が住んでいる。パプア系諸族とオーストラリア原住民がそれである。彼らの祖先は、インドネシア、ニューギニア、オーストラリアがまだ陸続きであったころに、インドネシア方面から移住してきたと考えられている。とく

に、オーストラリア大陸に人々が住み始めたのは、三万年前のころと推定されている。また、一八七六年をもって絶滅したタスマニア人はオーストラリア原住民と同じく旧石器文化段階のオーストラロイドに属し、およそ八〇〇〇年前にオーストラリア本土から移住したものである。

第三のポリネシア人の南米起源説は、ノルウェーの著名な探検家トール・ヘイエルダールによって提唱された。彼は、イースター島の巨石建造物が、ペルーのプレ・インカの巨石文化に類似していること、ポリネシアで栽培されているサツマイモの原産地が南米であることに着目した。また、ポリネシア海域では、東からの海流と貿易風が周年、卓越することから、西へ向かつての航海は不可能であるとの見方をした。

これらの説を実証するため、ヘイエルダールは、一九四七年に南米産のバルサ材で組んだいかだによって、ペルーの海岸からポリネシアへの漂流実験を試みた。このコン・ティキ号と名づけられたいかだは、約一〇〇日の航海のすえ、無事ポリネシアのツアモツ諸島に漂着した。この航海の成功によって、ヘイエルダールは、自説の正当性を強く主張した。しかし、彼の主張に対して多くの学者から反論が提示された。イースター島の巨石文化は、近くのマルケサスの文化に類似しており、その形は東南アジアの巨石文化に相通する点が多いこと、サツマイモの伝播についても、それ以外のすべての栽培植物が東南アジア起源であることから、南米に漂着したポリネシア人によって故郷へ持ち帰られたこと。海流、貿易風も、一年のうち、西から流れたり吹いたりする時期があることなど。

いずれにしても、言語学、考古学、民族学などの研究成果から、ポリネシア人の東南アジア起源説は、動かしがたいいくつもの事実を示してくれる。「島世界」の住人は、東南アジアの故地を離れて、少なくとも三〇〇〇年のあいだに、太平洋の島々に移住・定着した「航海民族」の末裔なのである。

# 太平洋の探検時代

一五二三年、スペインの武將バルボアは、インディオから山の向こうに「別の海」があると聞かされ、パナマ地峡の山頂から西南方に広がる大海原を目にした。これが、ヨーロッパ人の最初の太平洋の発見であり、彼はそれを「南の海」と命名した。コロンブスの新大陸発見から二一年目のことである。

この南の海にはじめて船を乗り入れ、これを横断してアジアに到達したのは、最初の世界周航者、ポルトガル人のマゼランである。彼は、スペイン国王カルロス一世の庇護のもとに、一五一九年、旗艦トリニダード号以下五隻の船隊をくんでセビリヤを出航した。南米大陸の東岸沿いに南下したマゼラン隊は、一五二〇年一〇月に、のちに「マゼラン海峡」と名づけられた大陸西岸への水路を発見した。白人未踏の大洋に踏みこんでから、悪戦苦闘の九八日の航海のすえ、グアム島に到着した。その間の航海は、食糧・飲料水の欠乏と病魔との戦いの毎日で惨たんたるものであったが、海そのものは、終始平穏であったことから、「おだやかな海」(太平洋)と命名した。奇妙なことに、マゼランは太平洋では、不毛な二つの無人島に遭遇しただけである。

マゼラン以降一六世紀の航海は、ヨーロッパで古くから信じられてきた「未知の南方大陸」を発見する魅力にとりつかれたスペインの探検家によってなされた。ペルー総督の甥メンダーニャは、前回の航海で発見したソロモン諸島に植民地を建設するために出航した一五九五年の航海で、マルケサス諸島を発見した。これがヨーロッパ人の知見に入った最初のポリネシアの主要な島である。

一七世紀に入ると、東インドに東洋貿易の拠点を築いたオランダが、新しい交易地の開拓のため太平洋への進出を開始する。オランダ人の探検家は、ニューギニア北岸の島々やオーストラリア西岸を周航したり、イースター島やサモア、フィジー諸島の発

イースター島のかつての聖域オロンゴで発見された石像。波をうち砕く者と呼ばれている



マルケサス諸島で使用されていた木製の武器(こん棒)の柄



トンガのリード・パイプ(笛) 島人はこれらの楽器でクックの一行をもてなしたといわれている

見など大きな足跡を残している。なかでも、オーストラリア南岸を東航し、今日彼の名でよばれるタスマン島を発見したタスマンの貢献は大きい。彼はまた、ニューギニアランド南島の発見者でもある。

一八世紀になると、太平洋の探検は、イギリス人とフランス人の時代になる。まず、イギリスの航海者としては、海賊ダンピアの名があげられる。彼は、オーストラリアの西岸を巡航してそこをダンピアランドと名づけたり、ニューブリテン島や、ニューブリテン島とニューギニアとを分かちつダンピア海峡を発見した。しかし、ダンピアの最大の貢献は、探検の成果そのものよりも、彼の教養ある文筆活動においてである。彼の著した『世界周航記』やその他の観察記録に描かれた南太平洋のいきいきとした生活の様子は、『ロビンソン・クルソーの冒険』(一七一九年)や『ガリヴァー旅行記』(一七二六年)などの文学作品を生みだすのに寄与した。

バイロン、ウォーリスなどによる、ツアモツ、ギルバート、タヒチの発見ののち、太平洋の歴史は、科学的探検の時代に入る。キャプテン・ジェームス・クックは、一七六九年、イギリス王立協会の要請で、金星の太陽面通過の観測のためにタヒチ島を訪れて以来、一七七九年にハワイ島での原住民との争いに命を落とすまでの間、三回にわたって太平洋の探検航海を行った。これらの航海でクックは、タヒチ島の西方の島々を発見し、王立協会の名にちなんで、

ソシエテ諸島と命名し、さらに、クック諸島、ニュー・ヘブリデス諸島の多くの島々、ニュー・カレドニア、ハワイ諸島などを発見し、また、ニューギニアランドやオーストラリア東岸をヨーロッパ人として初めて航海した。彼は、それまであいまいであった太平洋の多くの島々の位置と名称を決定し、現在とほとんど変わらない太平洋の地図を示した。

クックの地理学上の業績と同時に、科学者を同行しての探検は、多くの植物標本の収集や人類学的な観察記録を残すことになり、南太平洋の自然と文化の研究にとって、今なお貴重な資料として活用されている。

## 南太平洋の近代史

東インド諸島への香料貿易で幕を開けた太平洋の島々の「発見時代」も、一九世紀になるとヨーロッパ列強による植民地獲得の舞台となる。イギリスは、アメリカ独立の代償を求めて、オーストラリア、ニューギニアランドを植民地とし、さらにフィジーやトンガ王国、ニューギニア南東部を保護下においた。フランスは、タヒチ島、マルケサス諸島などを獲得し、メラネシアのニュー・カレドニアを領有し、ニュー・ヘブリデス諸島をイギリスと共同統治することにした。

一九世紀末期になると、ドイツ、アメリカも植民



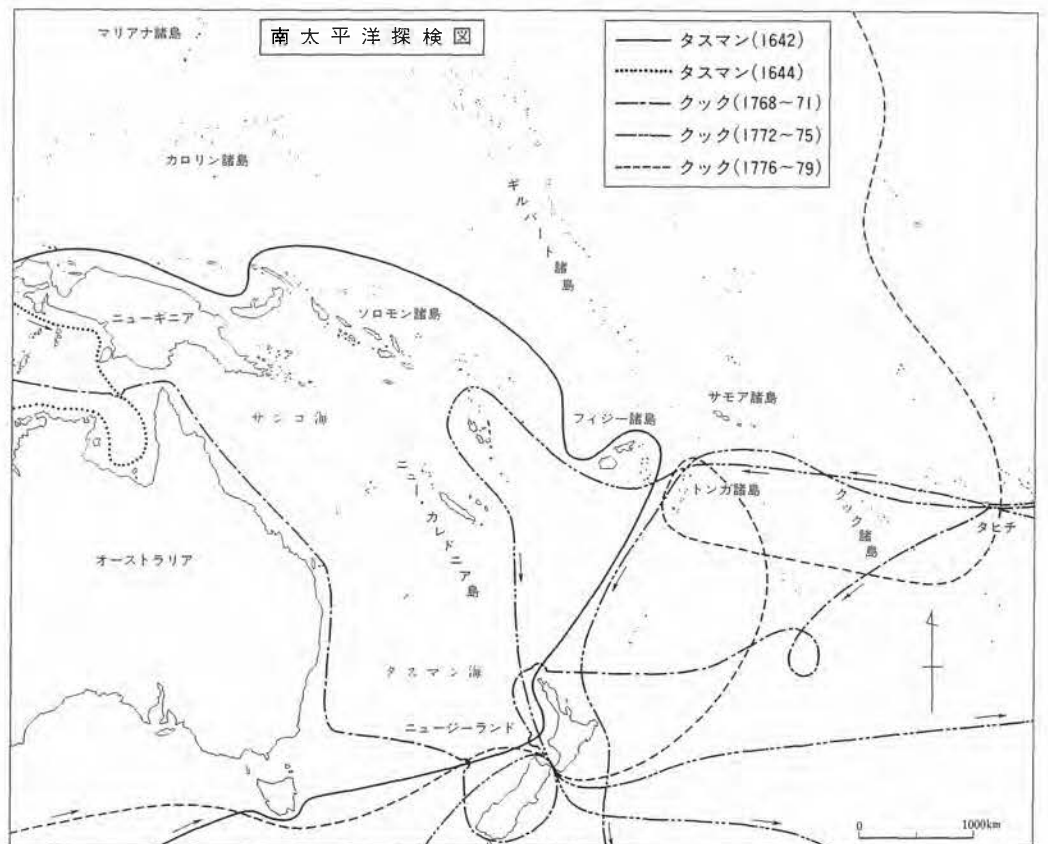
ポルトガルの探検家マゼラン 1519年初の世界一周を試みたがフィリピンで客死した 太平洋の命名 グアム島の発見などその功績は大きい

地獲得競争に加わる。ドイツは、ニューギニア北東部とソロモン諸島の一部を獲得し、米西戦争に敗れたスペインから、ミクロネシアの島々（グアム、ギルバートを除く）を買収した。アメリカは、ハワイ王国を併合し、スペインからグアム島を買収した。サモア諸島は、アメリカとドイツによって東西に分割された。このように、オセアニアは、ほとんどの島々が列強の帝国主義の支配下におかれてしまった。二〇世紀に入り、第一次世界大戦でのドイツの敗北により、旧ドイツ領のうちミクロネシアは日本、メラネシアに属する部分はオーストラリア、サモアはニューギニアのそれぞれ委任統治領となった。また、リン鉱石で有名なナウル島は、イギリス連邦の共同統治下におかれた。第二次大戦後には、ミクロネシアは日本に代わってアメリカの国連信託統治領となった。

しかし、そのような政治的帰属の変更よりも、オセアニアの歴史で重要な出来事は、オーストラリアとニューギニアのイギリスからの独立である。オーストラリアは一九〇一年、ニューギニアは一九〇七年にそれぞれイギリス連邦内の自治領の地位を獲得した。それらの独立は、オセアニアに初めて近代国家が誕生したというものの、ヨーロッパからの入植者による白人国家であり、オセアニアの人々の手による国づくりは、二〇世紀後半まで待たなければならなかった。



イギリスの探検家クック 1768年から1779年ハワイで殺害されるまで3回の世界周航を行ない太平洋の島々を発見してヨーロッパに紹介した



右 キャプテン・クックが訪れた当時のタヒチ  
左 南極圏を航行するクックの船団 彼らは南緯61度まで南下した 図版はとがして飲料水とするために氷をひきあげようとしているところ

第一次マオリ戦争でイギリス軍の捕虜になったマオリの人々。マオリ族は勇敢でよく持ちこたえたがイギリス軍の圧倒的な火力の前には惨敗せざるをえなかった。



アメリカと同じようにオーストラリアを開拓し建国したのは鎖につながれたイギリスの囚人たちであった。



砂金を洗う人々。1851年に金が発見されると全世界から70万人が一攫千金を夢見てやってきた。



⇨1907年英連邦自治領化の宣言にわくニュージーランド市民。⇩1901年オーストラリアも連邦国として独立国家となった。



ニュージーランドの開拓者たちの小屋。Vハットと呼ばれ雨露をしのぐだけの粗末な小屋であった。

## 南太平洋の夜明け

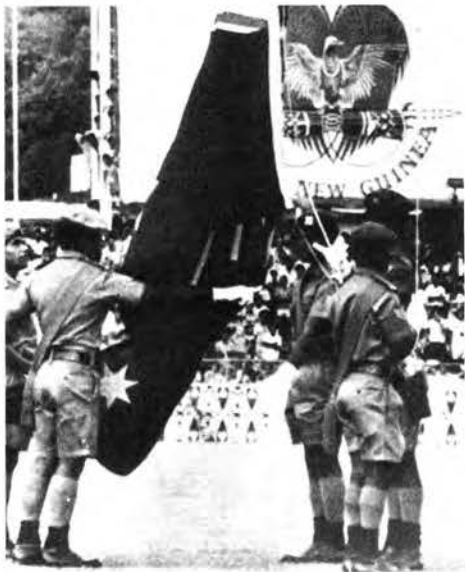
ヨーロッパ人の進出で始まるオセアニアの新しい歴史の展開は、原住民にとっては、予期せぬ受難の歴史の幕開けであった。「大航海時代」以降オセアニアを訪れた人は、捕鯨船の乗組員、裁植業者、奴隷商人、貿易業者、キリスト教布教者などである。彼らは、自分らの欲望や目的をはたすために、純心な

原住民につけこんで、略奪、搾取、虐殺など数々の非道な振るまいをした。また、彼らの持ち込んだ疾病、銃砲火器、麻薬などの弊害で原住民の伝統的社会は大きく変ぼうした。原住民社会を襲ったこのような不幸は、まず、人口の驚くべき激減をひき起こし、彼らの伝統文化を根底から解体し、深刻な社会不安と混乱へと拍車をかけた。このような「西洋文明」の侵入に対して、オセアニアの人々は、ただ耐え、逃避するしかなさ術がなかった。「南国の楽園」というイメージは、南太平洋の人々をふみ台にした西洋人の自己中心的なものの見方に基づいてつくられたものといえよう。

しかし、民族主義的な政治運動の高まりとともに、第二次世界大戦後、オセアニアにも、あいついで「原住民国家」が誕生した。一九六二年には西サモア、六八年にはナウル、七〇年にはフィジー、トンガがそれぞれ独立した。そして、一九七五年には、オーストラリア領パプアと国連信託統治領ニューギニアが合体して、パプア・ニューギニアの国名のもとにイギリス連邦内の独立国として誕生した。

ミクロネシアでも、ギルバート諸島が、キリバティと名前をかえ一九七九年に独立した。また、世界最後の国連信託統治領であったミクロネシアの島も、一九八一年の統治期限終了をひかえゆれ動いている。いち早く、マリアナ諸島は、「北マリアナ連邦」を結成し、アメリカの自治領化を目指している。残りの島々も、一九七八年に実施された住民投票により、独立の道へと歩み出した。アメリカの軍事基地を擁するマーシャル諸島は、アメリカの自治領化を、パラオ諸島は、共和国として独立を、そして、ヤップ、トラック、ポナペ、コスラエは、「ミクロネシア連邦」を結成して独立を目標としている。

二〇世紀の後半に独立した太平洋の諸国家は、リン鉱資源に恵まれたナウル共和国を除くと、いずれも経済的自立への道はほど遠く、それまでの統治国の援助のもとに、近代国家への離陸を模索している状況である。



1975年9月16日に独立したパプア・ニューギニア



1975年11月労働党のウィットラム首相を敗ってオーストラリア首相となったフレーザー自由党党主

## 白人国家の植民史

一七七〇年、クックがシドニー南部のボタニー湾に上陸し、イギリス領有を宣言してこの土地をニュー・サウス・ウェールズと名づけた。そしてこの新大陸は「未知の南方大陸」にちなんでオーストラリアと呼ばれることになった。

この新天地は、まず、イギリスの流刑植民地として開発が始まった。一七八八年、フィリップ大佐の率いる囚人を含む約一〇〇〇人の植民者が、シドニーに植民市を建設した。本国から送り込まれる囚人の数は増大するものの、農業経験者は少なく、また東部の地味も悪く、初期の植民は進まなかった。一八二三年に、ブルーマウンテンを越える道が開拓され、広大で肥沃な大平原が発見された。西部の地は、農業に限らず、牧羊業の発展に適した土地でもあった。

一八五一年には、東部で金鉱が発見され、一攫千金を夢みる人々がおしよせ、以後急激な人口の増加



1980年7月30日ニュー・ヘブリデス諸島はバヌアツ共和国として独立した

をみた。一八六〇年代になると、羊毛、コムギを主とする農牧業、金を中心とする鉱業が発展し、それにもなつて商工業も活発になった。現在の州となっている領域をもつ六つの植民地も成立した。これらの植民地は、本国に対する共同の利益を守るための理由で、一九〇一年にオーストラリア連邦の名のもとに結集した。現在のオーストラリアの人口は、一三二〇万を数えるが、そのうち九割はイギリス系の人々によって占められている。これは、「オーストラリアは白人のみの土地である」という白豪主義によるものである。しかし、第二次世界大戦後から、イギリス以外の植民者も多く受け入れられている。

ニュージールランドがクックに発見された一七六九年当時、原住民マオリ族の人口は三〇万人と報告されている。マオリ族は、暖かい北島に居住し、タロイモやサツマイモを主作物とする原始農耕に従事していた。ここを訪れた初期の白人は、捕鯨漁夫やアザラシの毛皮をとる貿易商人に限られていた。一八四〇年、最初のイギリス人入植者が、ポートニコルソンに上陸し、ここにウェリントンWellingtonの町を建設した。同年、イギリスの領有宣言がなされ、マオリ族の首長との間に、主権譲渡に関するワイタンギ条約が締結された。オークランドに首府が定められたのもこの年である。

一八四三年、土地収用をめぐるマオリ族の白人に対する不信が高まり、第一次マオリ戦争が勃発した。一八六一年には、南島オタゴで砂金が発見され、また、第二次マオリ戦争終結後（一八八二年）導入された冷凍船によって、ニュージールランド産の肉や酪農製品のイギリス市場への輸送が可能になった。

これらは、農牧業や経済の発展に大きな力となった。一九〇七年には、イギリス連邦内の自治領として独立国の地位を獲得した。

現在の総人口三二一万人の大半は、イギリスを主とするヨーロッパ系であり、マオリ族は混血を含めて、約九割を占めるにすぎない。